

## 第5回高知県子ども読書活動推進協議会議事録

平成26年9月8日(月) 10:00～12:00  
高知県庁西庁舎2階教育委員室

### 1. 開会

### 2. 議事

#### (1) 協議

- 「第二次高知県子ども読書活動推進計画」における平成26年度の取組(中間)について  
～取組の進捗状況確認・助言、評価について～

【説明】第3章 1. 子どもを自主的な読書活動へいざなうために

#### 1. 家庭における子どもの読書活動の推進について

【質疑・応答】

(委員)

読書参観日とは、どういったものか。

(事務局)

内容は様々で学校の実情を考え、講演会や本の読み聞かせ等の活動を取り入れた参観授業をするものである。

(委員)

保護者等がいる時にするのか。

(事務局)

地域の方も参加するところもある。

【説明】2. 地域における子どもの読書活動の推進について

【質疑・応答】

(委員)

学校地域支援本部事業に取り組む市町村の中で読書活動に取り組んでいる割合はどのくらいか。

(事務局)

今年度、学校地域支援本部事業を18市町村で進めている。その中で読書活動を取り入れているのは9市町村である。

(委員)

学校支援地域本部事業の詳細、進捗状況について聞きたい。

(事務局)

学校地域支援本部事業自体は、平成20年から委託事業。23年から補助事業となり、取り組んでいる。今年度、19市町村で取り組み、35の支援本部がある。活動内容は、学習支援及び読書活動支援、あるいは安全指導(登下校に町に立つ)、あるいは防災活動についての指導に加わるといった取組をしている。

(委員)

読書に関わって取り組まれていることはどんなことか。

(事務局)

読書については、支援本部それぞれに違いはあるが、支援員の方や公民館図書室等の担当が読み聞かせを行ったり、おはなしお届け隊等、民間の団体を読書イベントとして招き、読み聞かせやパネルシアター等を提供したりしている事例もある。

(委員)

学校の中の支援であり、これが根付いていけば読書も広がると思う。中学校が10校というのはすこし少ない。中学生の読書量が伸びない実情もある。事業が拡大していけば違ってくるのではないか。

(委員長)

この事業の枠というものはあるのか。

(事務局)

枠はない。事務局としても事業拡大に向け市町村訪問等を行い、関係機関や市町村教育長に促している。

(委員長)

県立図書館のレファレンス・サービスについて説明をお願いしたい。

(事務局)

レファレンス・サービスとは、利用者の質問に対して、文献に基づいて記述されていることを紹介したり、この本や雑誌で調べれば、分かるのではないかとといったアドバイスをしたりするサービスである。必ず答えられるとは限らない。また、答えたことが正しいことを保証するものではない。できるだけ複数の文献を紹介し、「これらの本には、このように書いています。」という提供の仕方をしている。文献がたくさんある県立図書館の方が答えられる可能性が高く、市町村立図書館でできない場合は県立図書館の方が手伝うという仕組みになっている。

(委員長)

直接、県立図書館に要望がある場合もあれば、市町村の図書館から調べてほしいと県立図書館にくる場合があるのか。

(事務局)

市町村立図書館の窓口においでになる利用者が直接県立図書館に来るのは難しい。

(委員長)

電話等はないのか。

(事務局)

電話等でもできるが、本を見ながらというのはできない。市町村立図書館が窓口で聞き、急ぎでなければ後から本を回すというケースは多い。

(委員長)

本の有無を聞く質問で終わっていることはないか。

(事務局)

それもある。県立図書館の子ども室に来る子どもにはきちんとレファレンスしている。

(委員)

今年、文学館でミッフィー展を開催していた。赤ちゃんを連れてお母さんたちがたくさんいた。イベントの後、紹介本を展示し、購入もできるようになっていた。県立図書館でも借りられるようになっていた。あのように親の世代を図書館に向けるイベント的なことは、効果的であると感じた。県立図書館の夏休み図書館アドベンチャーの好評である。こういう子どもや親を引き付けるものが夏休みは大事である。

### 【説明】 3. 学校における子どもの読書活動の推進について

#### 【質疑・応答】

(委員)

全く読書をしない小学生と中学生の割合が、小6で16.1%、中3で28.2%とあるが、中学生になると全く読まない生徒が倍近く増えている。以前からこういう傾向なのか。

(事務局)

平成19年度から「学力学習状況調査」が始まっているが、そのころから比べると年々その率は下がってきている。当初は中学生が32.33%、小学生は21.22%だった。学校では読書の時間を設定している。そこで適切に子どもたちが本当に読む時間をしっかり確保していれば、まず1週間トータルで10分の読書が全くないということはないはずなのだが。

(委員)

本校も朝の読書8時半から40分まで、合図もして行っている。しかし、中には宿題をやってきておらず、そ

の時間にやっている子どもも、ゼロではない。もちろん「宿題はまたね。」と声はかけている。おそらく中学校でもそういう子どもがいるのではないかと。そういう子どもがアンケートで『全く読んでいない』と回答したのではないかと。

(委員長)

学校では10分間の朝読をしている。きちんと取り組んでいる子どもは『読書をしている』と答えているのか。

(事務局)

そうです。

(委員)

一番のポイントだと思うのは、自主的な読書活動というものになっているかだと思う。数字的には不読率は減っているかもしれないが、本当に自主的な読書活動、日常的な読書活動になるのが目標である。そこがどのようになっているのか知りたい。また、中学校で数値が上がってくる。高校ではどうなのか。これにはネットの影響があると思う。中学生の女の子は、1日中、携帯・スマホを持って離さないと聞く。それを本に持ち換える局面、動機がどうなのか。3～4時間、毎日見ている中で、新聞や本を読むためにどのふうに対応しているのか、読書活動を阻害するものへの対応、ネットでも電子新聞や電子図書等があるが、やはり本物に出会う、本物の物語に出会うような仕掛けが必要だと思う。

(委員長)

指標一覧の7番には「家や図書館で…」となっている。これで子どもたちは授業中の読書は入らないと思っている。家や学校で読書時間が10分以上というのには、学校の授業は考えないということか。

(事務局)

読書の時間というのは、授業外での設定である。

(委員長)

それならば、この項目の『家や図書館』に入るのか。質問が『家や図書館で普段読んでいる時間』というのであれば、子どもたちは入れないのではないかと。

(事務局)

正式な項目の質問紙は「学校の授業時間以外に、普段1日どのくらいの時間読書をしますか(教科書は除く)」となっている。

(委員長)

実際の質問は、指標一覧の文言とは違うか。

(事務局)

はい。平成19年度の調査からは若干変わってきている。大体調査の趣旨に沿ったところは同様の項目ということで、平成22年度からまとめて作られている。

(委員長)

これには読書の時間は入れてもいいということなのか。

(事務局)

読書時間も含めてという、という理解になっている。子どもたち一人ひとりがどのように理解して答えているか分からないが、質問項目では、今年度は「学校の授業時間以外に」ということになっている。

(委員)

勘違いしている子どもがいるかもしれない。

(事務局)

いるかもしれません。

(事務局)

7番の項目については、不読率を減らしていくという方向性で考えている。また、子どもたちの意識がどこにあるのかによって数字が変わるが、中学校での伸びが顕著であった。

(委員長)

不読率が下がったのか。

(事務局)

いえ、そうではない。読んでいる割合である。

(委員)

10分以上読んでいる数値は全国平均より、高くなってきているというのが状況だと思う。取組の成果が出ていると認識しているが、どういうことか。

(委員)

おそらく中学校は全国的にも苦戦していると思われる。しかし、中学生の不読率は、平均で6ポイント以上低い。これは、中学校で努力があり取組の成果ではないかと思っている。

(委員)

指標一覧の9番、「学校図書館を活用した授業の計画的実施率」の中学校の目標値が、9.1%から30%となっている。これは、ことばの力育成プロジェクトであるとか、学校図書館支援員もしくは学校司書の配置などと相関関係があるとみていいのか。

(事務局)

その点については、検討中である。

(委員)

目標値が3倍です。私は学校の司書の配置率と関係してくると考えている。やはり小中学校の先生方は、学校司書がいるのといないのとでは授業に図書を取り入れたり広げたりといったところで違いが出るということをよく言われている。6月に学校図書館法改正され学校司書という職名が初めてできたが、これはまだ努力義務に留まっている。前回の協議会でも学校司書のことに触れたが、様々な情報も得ながらこれらについてどのように協議会として取り組んでいけばいいのか考えていきたい。

(事務局)

昨年度と比べて、月曜から金曜まで10分も読んでないと答えた小学生は、2.4%減少。中学生では4.2%減少している。

(委員長)

32%ぐらいだったのが28%ぐらいになっている。

(事務局)

全国との差では、小学校は3%、中学校では6%くらい高知県の方が低くなっている。少ないということである。全国と比較すると読んでいる子どもたちが多いというである。

(委員)

これは、朝読の影響なのか。

(事務局)

はい、そうだと思う。

(委員)

読書量が増えたのにも影響があり、不読率も減った。朝読も浸透している。

(事務局)

朝読については、もう浸透している。

(委員長)

先の質問に戻るが、朝読を読書時間に入れないと子どもたちは考えているのでしょうか。

(事務局)

入れている子どもいると思う。子どもたちの判断の問題である。

(委員長)

入れているのであれば問題である。毎日学校で取り組んでいるのに、10分未満もしくは全く読まない生徒が42%である。

(委員)

全く読まない生徒は減った。

(事務局)

はい。

(委員長)

これはかなり大きいと思う。要因は何か。

(事務局)

昨年度までは30%台ではほぼ変わらずが、今年度になって中学生は減った。

(委員)

新聞の書き写しとか、新聞を読んでも読書へ入れたということはないか。

(委員長)

新聞を読んでいるだろうか。

(委員)

新聞を読むのも読書でしょう。

(事務局)

教科書以外とかということですので、新聞を読書と捉える生徒がいてもおかしくない。

## 【説明】Ⅱ. 子どもの読書活動を支える環境を整備するために

### 1. 公共図書館等の機能の充実について

#### 【質疑・応答】

(委員長)

団体貸出や長期一括貸出の活発化とあるが、この数値は妥当なのか、まだまだ不十分なのか、良くなっているのか。

(事務局)

全国との比較は、あまりにもばらつきがあり何とも言えない。高知県立図書館は、他の県立図書館に比べれば、市町村に向けての貸出は活発な方である。しかし、逆にこれは問題も抱えている。

(委員長)

活発化の数字が上昇するというのは、逆にいえば市町村の図書館の貧弱さを表している。

(事務局)

両面がある。

(委員)

図書館の床面積が狭いとあるがどういうことか。

(事務局)

今は図書館の建設について国庫補助金も廃止されている。地方分権推進一括法以前は文部省の図書館建設補助金というものがあつたが、今は建設に当たっての補助はない。

## 【説明】2. 学校図書館等の機能の充実について

#### 【質疑・応答】

(委員)

高等学校における司書教諭または学校図書館担当職員を配置するとは、学校司書のことか。

(事務局)

司書とは限らない。司書を配置している場合もあるが、臨時という形で蔵書の整理に入っている場合もある。

(委員)

高等学校では専門的なこともたくさんあり、調べ学習するときなど支援員さんだけでは知識的に足りないこともたくさんあると思う。高校には学校司書を入れ、中学校までは少しずつ増やしていく事が必要ではないか。島根県松江市では、2008年に学校司書を21校に配置、2009年には全校配置（小学校33校、中学校15校）している。この時に作ったのが『学校図書館支援センター』である。司書教諭等を長年されていた先生がリーダー

一となり、計画的に教育課程が進んでいるかチェックしたり研修したりされている。学力的にも少しずつ上がってきていると聞いた。県内でも地域フォーラムで教員を退職された方が香南市の教育委員会に入り、学校図書館支援センター的な位置で取り組んでいることを聞いた。

(委員)

市の図書館と学校との連携をしている。

(委員)

高知市では、『ことばの力』の指定校もある。学校図書館支援員も配置されているが、それをまとめるというところがない。支援員には研修権がなく、1回だけ5月にあるだけである。悩んでいる支援員も多く、自主的に学校図書館協議会で行っているものもあるが、それほど回数も開けていない。支援員への手立てとか、できれば学校司書を増やしていくことも必要だと考える。

(委員)

香南市では、退職するまで図書を担当を務めていた先生が市の図書館に入った。その先生が学校の図書室を見直そうとまず野市東小学校へ入り、次に佐古小学校へと取組を広げている。子どもたちが喜ぶ図書室にするため支援員と一緒に学校図書館の改革を行っている。

(委員)

そういったリーダー的な方が必要である。

(委員)

子どもたちの学校図書館の利用が増えている。

(委員)

学校図書館支援員を指導するリーダー的な方がいないのが現状である。支援員はそれぞれで取り組んでいるという感じがある。教育委員会には図書担当の指導主事がいるが、他の業務もあり支援員を指導することには専念できていない。

(委員)

支援員の雇用期間は。

(事務局)

1年単位で更新である。

(委員)

連続雇用はあるのか。

(事務局)

あり得る。以前は雇用対策として行っていたので1年交代だったが、緊急雇用ではなくなった。2年、3年と務めておられる方も最近は出始めている。

(委員)

専門性が積み重なることによってできるようになる。

(委員)

支援員自体の協議会のようなものはないのか。

(事務局)

それはない。

(委員)

S L Aが土曜日に、支援員にも呼び掛け、本の修理の仕方や本の選び方を一緒に勉強している。自主的な参加で、全員というわけではない。

(委員)

松江市の事例は、先進的で、市教委単位でそういう支援員をサポートできる、またコーディネートできる仕組みである。

(委員)

松江市では支援センター長は副教育長、副長は学校教育課長である。それまで先進的に取り組まれていた市

教委の方がリーダーで担当職員として採用され、活性化が図れている。

**【説明】 3. 子どもの読書活動の推進のための人材育成について**

**【質疑・応答】**

(委員長)

教育センターで行っている各種研修の中で読書教育及び読書の活動、あるいは推進の充実という視点で行っているものはどれか。

(事務局)

はい、ここに挙げているものはすべて読書活動とか推進ということを踏まえたうえで行っている研修である。

**【説明】 III. 子どもの読書活動を総合的に推進するためについて**

**【質疑・応答】**

(委員)

11月1日、県の学校図書館協議会がJAXAの方を招聘し講演会を行う。読書＝文学というものがある。しかし、今「はやぶさ2」ももうすぐ飛び立つということもあり、科学的なことに興味がある子どもたちもいる。そういった子どもを一人でも増やしたいという趣旨で行う。

(委員長)

物語など文学系に偏らず、子どもたちの読書の幅を広げることは大事である。個々の子どもがどのような本と出会い、関心を持つかというところに、我々は手立てを打つ必要がある。

(委員長)

本日は大きく3つの観点からご説明・ご報告いただいた。1つ目は全体的に推進計画に沿って読書活動は向上している。その中で親の世代への働きかけが大事なのではないかと。また、子どもを引き付けるようなイベントの中で本と出合わせる、本への意欲を喚起することも必要ではないかと。夏休みアドベンチャーなどは有効な取組である。2つ目は、本を読まない子どもの問題。全く読まない子どもは減少し、全体的には読書活動は推進しているが、子どもの読書を阻害する、また、障害になることが進行している。例えば、スマホや携帯ゲーム、部活や習い事、宿題などもそうである。時間は限られている。こういった阻害要因にも目を向ける必要があるのではないかと。3つ目は、本と子どもたちとの出会いの場。人材をどのように育成するのか、どのように環境を整えていくのか。学校図書館支援員や学校司書等はまだまだ不足している。また、市町村の設備（環境面）の問題。松江市の学校図書館支援センターが先進的な例として挙げられた。学校図書館支援員や司書、ボランティアの方々の研修、どのように学校に配置し、活性化させていくのか。改めて組織的な問題が問われた。

**3. 閉会**

高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶